

出品作品一覧

1.	〔貝〕	1942年頃	水彩／紙
2.	朱	1936年	油彩／カンヴァス
3.	無題	1936年頃	油彩／カンヴァス
4.	アブストラクトデザイン	年代不詳	油彩／カンヴァス
5.	無題	1936年頃	油彩／カンヴァス
6.	自然	1953年	紙・木版
7.	蒲鉾板版木 No. 16, 19, 20, 21, 22, 25, 30, 31, 36, 40, 41, 42, 44	1950年頃	木（蒲鉾板）
8.	コラージュ	年代不詳	インク／紙
9.	コラージュ	年代不詳	インク／紙
10.	コラージュ	1940年	インク／紙
11.	コラージュ	年代不詳	インク／紙
12.	無題	1950年頃	墨／紙
13.	白い雲	1948年	油彩／カンヴァス
14.	（無題）	年代不詳	油彩／カンヴァス
15.	湖のほとりにて（1）	1948年	油彩／カンヴァス
16.	無題	1952年頃	拓本／紙
17.	Numbers One to Ten	1955年頃	リトグラフ／紙
18.	柱	1940年	木

長谷川三郎 略歴

- 1906年 11人きょうだいの三男として、山口県豊浦郡に生まれる
- 1910年 父銈五郎が三井物産神戸支店長となり、神戸市中山手通に転居
- 1918年 現在の芦屋市へ転居し、甲南小学校に編入
- 1926年 甲南高等学校卒業 東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学
- 1929年 大学卒業。米国を経て欧州で2年ほど遊学するが、父の死を機に帰国
- 1934年 新時代洋画展を創立
- 1937年 自由美術家協会を創立 戦時中は美術作家協会に名前を変える
- 1950年 自由美術家協会を脱退し、モダン・アート協会を創立
- 1954年 渡米し、ニューヨークに10か月滞在。翌年サンフランシスコへ移住
- 1957年 上顎がんのためサンフランシスコにて没す

甲南学園 長谷川三郎記念ギャラリー 企画展

長谷川三郎の手法 解体と構築

会期：2022年6月27日～7月12日
（開室 月・火 10時00分～16時30分）

会場：甲南高等学校・中学校 長谷川三郎記念ギャラリー
兵庫県芦屋市山手町31-3 甲南高等学校内

企画：長谷川三郎記念ギャラリー 岡田紀子・松永亮太

甲南小学校から高校時代までを芦屋で過ごした長谷川三郎（1906-57）は、戦前戦後の時代を駆け抜けた日本の近代抽象絵画のパイオニアと目される芸術家であり美術評論家です。

「中学生高校生時代、制服に油絵の具がくっついてゐるのを得意がるニキビ時代、それも終わりの頃に、陰影のない繪、細かい線を使った繪、を描いて、小出檜重先生に、イチリュウサイサブロウと號したらえゝな、とからかわれた。」
（長谷川三郎「美術に於る東洋と西洋」戦後未発表原稿）

長谷川は日本の伝統美の精神と西洋前衛美術運動との間に共通性を見出し、芸術の伝統を解体し構築することで同時代の新しい芸術の創出に力をそそぎました。異なる文化的文脈を横断する長谷川の取り組みは、高校時代に小出檜重のもとで学んだころから生涯にわたって続きました。

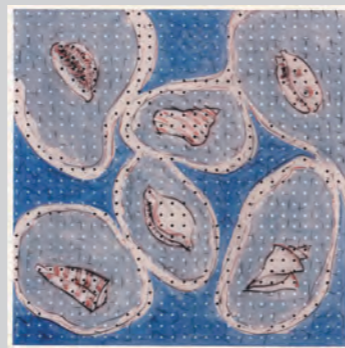
「僕の信ずる - そしてまた、これは最も新しい芸術家達の信念に他ならぬと思うが - 造形美術とは、土で、木で、大理石で、コンクリートで、草の汁で、墨で、絵具で、またこれらのつくり出す、面や線や量や色や、その組み合わせや、で唄う歌に他ならない。」
（長谷川三郎「新しき日本芸術」1935年）

大学卒業後ヨーロッパでの遊学を経て自由美術協会で発表した1930年代の油彩画には、絵の具をつけた様々な素材を画面上に押し付けてその抽象的な印影を構図に組み込んだものが散見され、また毛糸や新聞紙、小豆などを用いたコラージュにも、身近にあるものをその存在の構造から切り離して新たな意味を付与する手法を模索する跡が見られます。

『人間と貝殻』

己れのうちに閉ぢこもること屢々な
一生命の夢想にとっては
何ものも優美すぎ貴重すぎるといふことはない
粘着質の相重なる層は やがて
孤独者が手足を縮め 身をすくめる深い振れた腔内を
シャボン玉のように薄い膜で張りめぐらすのである
だが彼は 自身の作品と隠棲のあらゆる美しさを
竟かに知らずに終わるであろう。

（長谷川三郎未発表の詩）



1. 〔貝〕 1942年

戦中から戦後数年は長谷川の沈黙の時代と言われており、現存する作品は多くありません。それでも『貝』などに見られる、具象的表象の意味を無効化して覆いつくす繰り返しのリズムの注意深い適用には、長谷川が決して抽象絵画表現における知的探求を休止していたのではないことが読み取れるでしょう。

「新しい西洋に学ぶことは、古い東洋を否定する事ではない。古い東洋のすぐれたものに、再び新しい生命を吹き込み、復興する為に、新しい西洋の中のすぐれたものを、見きわめ、学ぶのである。」
（長谷川三郎「モンドリアン」1951年）

イサム・ノグチと共に国内を旅した1950年以降は墨を用いた表現に移行し、木造の漁船を解体した部材や、かまぼこ板に彫り込んだ単純な形を組み合わせて、拓本や版画を大小様々な作品にしています。既存の社会文化的要素をいったん物質から切り離し、そして文字とも模様とも、書道とも絵画ともつかない形にまとめ上げるこれらの制作手法は、長谷川の芸術哲学を象徴的に示しています。

また西洋美術の知見と、戦時中に深めた日本の伝統工芸や建築への造詣を活かして前衛書道や欧米の抽象表現主義の芸術家らとも積極的に交流し、冷戦の緊張下、従来の西洋的価値観への懐疑から東洋思想が注目されていた当時のアメリカに現代日本美術を紹介するため奔走します。

「強く現実を把もう。そして東西も新古もない、それゆえに真に民族的であり、東洋的であり、かつ世界的であり、正しく現代的である芸術、(…) 私は、そのような芸術が、この美しい国（敗戦の日本）で創られることを祈ろう。」
（長谷川三郎「美術の東西」1950年）

本展示では、未知の視覚芸術を実現しようとした長谷川の解体と構築の試みを、実際の作品と共にご覧ください。

引用文献

「美術に於る東洋と西洋」『長谷川三郎とその時代』下関市立美術館 1988年
「新しき日本芸術」『現代美術 2-1』創元社 1935年
「人間と貝殻」長谷川三郎記念ギャラリー所蔵 未発表原稿
「モンドリアン」『書之美』34号 研精會 1951年
「美術の東西 (3)」『三彩』42号 三彩社 1950年



写真：蒲鉾板版画を制作する長谷川三郎（1952年）